平成２７年度　教育論文

研究主題

ふるさとを大切にし、
進んで考え行動できる児童の育成

～くらしを見つめ、学びをつなぐ
「そよっ子のふるさと学習」を通して～

山都町立蘇陽小学校
研　究　同　人

は　じ　め　に

「第２期くまもと『夢への架け橋』教育プラン」の基本理念として「郷土に誇りを持ち、夢の実現を目指す熊本の人づくり」があります。「郷土の素晴らしい自然、伝統、文化を基盤として子どもたちが、社会で生き抜く力を身に付けること」を目指しています。このことを念頭に置き、本校の研究を進めてきました。そして、それだけではなく今日の喫緊の課題である「少子高齢化、過疎化、限界集落の増加」等にも目を向けなければなりません。そのために、へき地校の本校から解決に向けた取組を発信するために教育実践を行ってきました。

具体的には、今年度１０月に、全国へき地教育研究大会熊本大会で、本校は会場校として研究発表会をしました。昨年度から研究指定を受け、今年発表したのですが多くの参加者があり盛会のうちに終わることができました。私は今年度４月に本校に赴任したのですが、職員の研究意欲は高く、研究テーマである「ふるさとを大切にし、進んで行動できる児童の育成」のためには自分たち自身が地域に出かけ、地域の「ひと・こと・もの」をしっかりと把握しようと努力する姿がありました。職員一丸となり、ふるさと学習の大切さを体感し、どうしたら子どもたちが変容するか、目標に近づくか、児童の育成が図れるか日々研修を行ってきました。

その結果、この論文にもありますようにアンケート集計や、日々の児童の学習する様子から研究は間違っていなかったことがよくわかりました。特に「蘇陽にある昔から伝わっているものを知っていますか。」という問いに対して、「そう思う」「だいたいそう思う」と答えた児童が９０パーセントを超えるところまで意識が高まってきたことは、とても喜ばしいことです。私たちがやってきた研究の成果が表れ、このまま研究を続けて行こうという意欲が出てきました。さらに、学力面でも昨年度より上回った領域が多くなったことも、研究の確かな裏付けになったのではないかと思っています。

しかし、研究発表会後の意見・感想等からも「地域の資料等の効果的な活用の仕方」「交流学習の質の高め方」「人材バンクの更なる充実」等の課題が出されました。

そこで、今後もへき地校として、さまざまな課題に対して１つ１つ解決できるように、職員が１つになって研究実践を進めて行きたいと思っています。ご指導よろしくお願いいたします。

目次

はじめに

Ⅰ　研究の概要

１　研究主題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１
２　主題設定の理由　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１
３　研究主題のとらえ方　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３
４　研究の仮説及び内容　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４
５　研究の構想　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５

Ⅱ　研究の実際

１　児童の「課題」を大切にしてくらしを見つめ学びをつなぐ授業構成の工夫
（仮説１）　・・・・　６
（１）ふるさととつなぐカリキュラムの構築
（２）児童の「課題」を生み出す資料提供、教材教具の工夫
（３）児童のよさを伸ばし生かすための評価の工夫
◎実践事例　１・２・３

２　児童の「思い」を伝え合い、互いの考えをゆさぶり、深め合うための手立て
（仮説２）　・・・・　１１
（１）くらしを見つめ表現する活動の日常化
（２）交流活動の工夫
◎実践事例　４・５・６

３　学校と家庭・地域社会が連携・協力できる体制づくりや取組の計画的・継続的実践
（仮説３）　・・・・　１５
（１）実態把握
（２）家庭・地域との連携
（３）学習環境の整備・充実
◎実践事例　７・８・９

Ⅲ　研究のまとめ

１　結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１９
２　研究の成果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２０
３　今後の課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２０

おわりに

Ⅰ　研究の概要

１　研究主題

ふるさとを大切にし、進んで考え行動できる児童の育成
～くらしを見つめ、学びをつなぐ「そよっ子のふるさと学習」を通して～

２　主題設定の理由

（１）　今日的課題から

現在、小学校に在籍する児童が４０代となる２０５０年には日本の人口は約９７００万人に減少し、全国の６割以上の地域で無人化が急速に進むという。（国土交通省２０１４年３月）　昨今、テレビや新聞で「限界集落」という言葉をよく聞くようになった。また、多くの地方において、人口減少や高齢化の進行により、コミュニティや集落機能の維持、地域の伝統行事等の継承が困難となり、地域独自の歴史や文化そのものが消失の危機にある。さらに、地域の核となる存在である小中学校の統廃合や複式学級化が進み、閉校がその地域の活力の更なる低下を招いてきた。それは、まさしく本町の現状であり、喫緊の課題でもある。このような状況に対し、今、地域独自の文化・伝統・自然条件等の資源を生かした地域の活性化に取り組んでいくことで、質の高いくらしを営むことのできる、持続可能な地域づくりをめざしていくことが求められている。そこで、本研究を通して、児童がふるさとに誇りをもち、ふるさとの創造に主体的にかかわることができる能力や態度の育成を図っていきたい。

（２）　地域の特色

蘇陽小学校区は、標高５００ｍ～６００ｍに位置しており、阿蘇南外輪山麗の高原地帯に属し、有明海につながる緑川と太平洋につながる五ヶ瀬川の源流域にあたり、分水嶺が渓谷をつくり澄み切った清流が流れている。冬季は厳しい自然環境となる。

本校校区には、１万３千年前の縄文弥生時代の高畑乙の原遺跡があり、その他各時代の遺跡や遺物が発見されている。また今から約４００年前に始まったとされる神楽があり、平成１３年から、高千穂、阿蘇、蘇陽の３地区をつなぐ神楽サミットが開催されている。

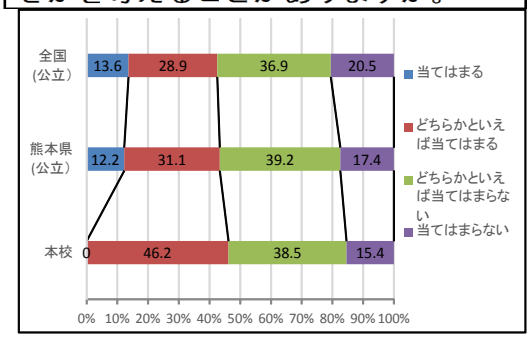
（３）　本校教育目標から

県の教育振興基本計画である「第２期くまもと『夢への架け橋』教育プラン」において基本理念として「郷土に誇りをもち、夢の実現を目指す熊本の人づくり」が謳われている。そして目指す姿として、「熊本の自然や伝統、文化を誇りに思い、国際的な視野

を持って、未来を切り拓く人」と示されている。このことを踏まえ、将来のふるさとを担う人材として育成するという願いを込めて、本年の教育目標は「ふるさとを大切にし、心豊かでたくましく、自ら学ぶ子どもの育成」に設定した。この教育目標の達成に向け、努力目標及び具体的実践事項を設定しながら日々の教育実践を進めている。

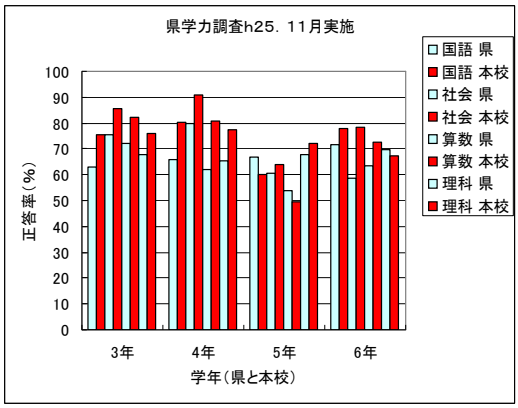
（４） 児童の実態から

本校には、本年度、７７名の児童が在籍している。学習や活動にもまじめに取り組む姿勢がある。課題としては、指示されたことをすることはできるが、自ら進んで課題を見つけ、課題解決に向けて取り組む力が十分に育っているとは言えないという点が挙げられる。児童は、自分達がくらす「蘇陽」が大好きである。その理由には、「自然が豊か、空気がきれい、生き物がたくさんいる、野菜や水がおいしい・・・」などと「蘇陽は、自然豊かなところ」ととらえ、この恵まれた自然環境を実感している。しかし、それが当たり前のような意識でとらえて生活しているようにも見える。この自然も、実は、人々が手を加え、育てながら守り伝えてきたのである。そのことを家族とのくらしや地域の行事などから見聞きはしても、自分から積極的にかかわっていくまでには至っていない児童も多い。



【グラフ１　全国学力学習状況調査（H26.4）】

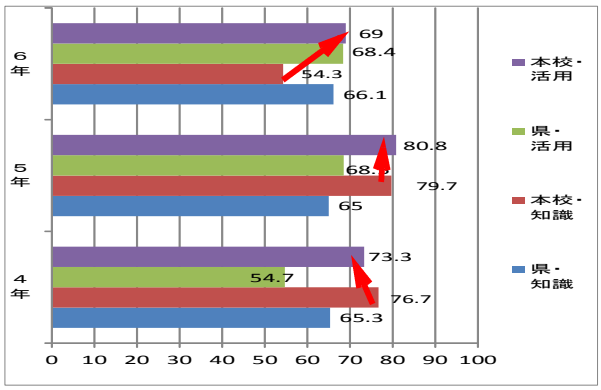
本研究をスタートするにあたり、まず、平成２６年度に実施された全国学力・学習状況調査、平成２５年度県学力調査（３～６年）及び標準学力検査結果の分析を行った。その結果、「地域の行事に参加している」と答えた児童の比率は69.2%で、全国（37.7%）、熊本県（42.7%）に比べ高かったが、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか。」の問いに「当てはまる」（グラフ１）と答えた児童は 0.0%で、他にも「総合的な学習の時間の普段の生活・社会での有用感をもっている」（38.5%）と答えた児童がどちらも全国、熊本県と比べ低いことが分かった。また、県学力調査の結果（グラフ２）では、すべての学年で４教科ともほぼ県平均を上回っている。しかし、さらに詳しくみてみると、国語の「話す・聞く」において県平均を下回り、標準学力検査の結果



【グラフ２　県学力調査（H25.11）】

でも標準を下回っている学年が見られた。さらに、「知識と活用」の定着率（グラフ３）を比較すると、知識より活用が下がっている学年もみられた。

これらのことから、「総合的な学習の時間の取り組むべき課題を整理してよりよいものにしていく必要があること、内容を整理しながら聞いたり話したりしていく力を付けていくこと、学んだ知識を活用していく力をさらに付けていく必要があること」が分かった。



【グラフ３ 県学力調査 国語「知識と活用」の定着率比較】(H26.2)

以上のことを踏まえ、学力の向上を図っていきながら、児童がふるさとのよさを実感することができ、くらしの中にある課題を発見・追究していく探究的・協同的な学習を通して、ふるさとの自然や文化が貴重なもので、自分達のくらしがいかに豊かであるかを認識させていくことをねらいとした。同時に、ふるさとの自然・文化に感謝しながら自分達のくらしを高めてきた人々の姿に気付かせ、ふるさとを大切にし、進んで課題について考え、解決する力を育てることにより、自己の生き方をつくり出していく児童の育成をめざして、本研究主題を設定した。

３　研究主題のとらえ方

（１）「ふるさとを大切にし」とは

生まれ育ったふるさと蘇陽のすばらしさを知り、誇りをもって「蘇陽が好き」と言える、ふるさとで生きている自分を愛することができる、自尊感情をもった児童の姿を意味している。地域の人や文化等に出会っていく中で、くらしを見つめ直す問いを「課題」ととらえる。その「課題」を核にして、豊かな素材を生かした探究的な学習を行っていくことで、蘇陽で生きる人々の思いや生き方・文化のすばらしさを実感し、ふるさとを大切にすることができるようになるものと考える。

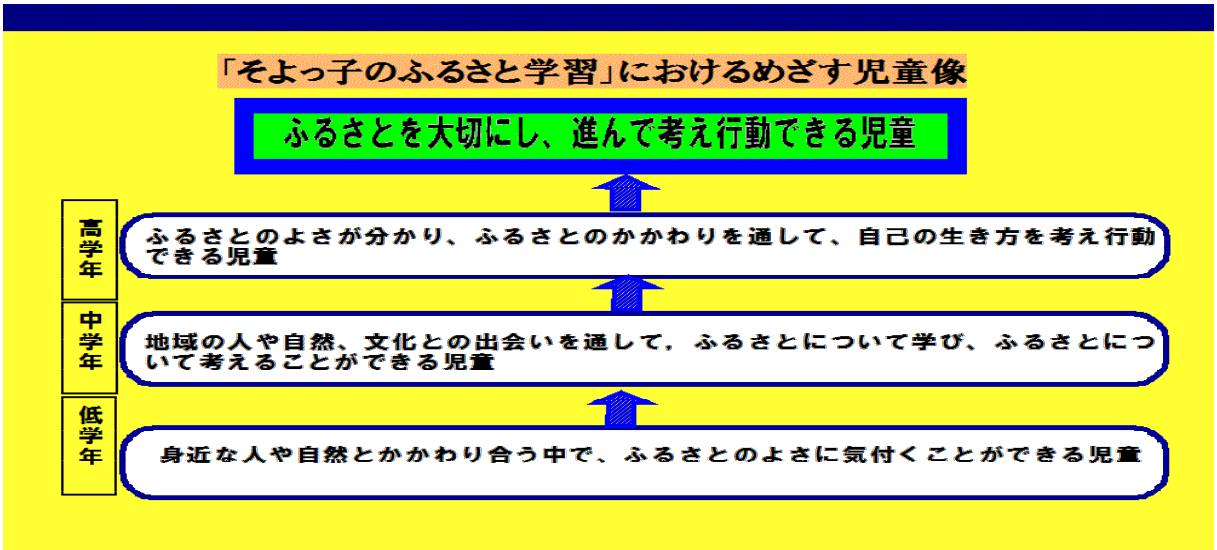
（２）「進んで考え行動できる児童」とは

ふるさとのよさが分かり、ふるさととのかかわりを通して「課題」に気付き、自分の「思い」を表現し、よりよい解決方法を生み出すなど、自己の生き方を考え行動できる児童の姿を意味している。

（３）「くらしを見つめ、学びをつなぐ『そよっ子のふるさと学習』」とは

ふるさとの素材を「課題」にして、各教科で身に付けた知識や技能を発揮しながら、解決のために探究活動を行うなかで、収集した情報をつないで検討したり、根拠を明らかにしたりしながら考え合う協同的な学習ととらえる。そして、生活・総合的な学習の時間での学習意欲の高まりを各教科につなぎ、その相互作用によって確かな力を付けていくことをめざした。

そこで、本校では、下図のような考え方で、「めざす児童像」を設定し「そよっ子のふるさと学習」の実践を進めてきた。



４　研究の仮説及び内容

（１）研究の仮説

仮説１	仮説２	仮説３
児童の「課題」を大切にしてくらしを見つめ学びをつなぐ授業構成を工夫していけば、ふるさとを大切にし、進んで考え行動できる児童が育つであろう。	児童の「思い」を伝え合い、互いの考えをゆさぶり、深め合うための手立てを工夫していけば、ふるさとを大切にして、進んで考え行動できる児童が育つであろう。	学校と家庭・地域社会が連携・協力できる体制づくりや取組を計画的・継続的に実践していけば、ふるさとを大切にし、進んで考え行動できる児童が育つであろう。

（２）研究の内容・組織（部会）

☆授業研究部会	☆伝え合い研究部会	☆環境・地域連携研究部会
○ふるさととつなぐカリキュラムの構築 ○児童の「課題」を生み出す資料提供、教材教具の工夫 ○児童のよさを伸ばし生かすための評価の工夫	○くらしを見つめ表現する活動の日常化 ○交流活動の工夫 ・教師の役割の明確化 ・交流の方法と場づくりの工夫	○実態把握 ○家庭・地域との連携 ○学習環境の整理･充実

５　研究の構想

教育の今日的課題

地域･保護者・教師の願い

各種法令

学校教育目標

ふるさとを大切にし、心豊かで　たくましく
自ら学ぶ子どもの育成

校訓　　気づき　考え　実行する蘇陽の子

児童の実態

・学習や体験活動にも真面目に取り組む。
・体験活動・ふれあい活動が好きで地域の行事などにも積極的に参加する児童が多い。
・進んで発言する姿も見られるようになってきたが、内容を整理しながら聞いたり、話したりしていくことに課題が見られる。

研究主題

ふるさとを大切にし、進んで考え行動できる児童の育成

～くらしを見つめ、学びをつなぐ「そよっ子のふるさと学習」を通して～

「そよっ子のふるさと学習」

めざす児童像

ふるさとを大切にし、進んで考え行動できる児童

探　究　　**協　同**

ふるさとを大切にする　　**進んで考え行動する**　　**くらしを見つめ学びをつなぐ**

仮説１

★児童の「課題」を大切にしてくらしを見つめ学びをつなぐ授業構成の工夫

〇ふるさととつなぐカリキュラムの構築
〇児童の「課題」を生み出す資料提供、教材教具の工夫
〇児童のよさを伸ばし生かすための評価の工夫

仮説２

★児童の「思い」を伝え合い、互いの考えをゆさぶり、深め合うための手立ての工夫

〇くらしを見つめ表現する活動の日常化
〇交流活動の工夫
・教師の役割の明確化
・交流の方法と場づくりの工夫

仮説３

★学校と家庭・地域社会が連携協力できる体制づくりや取組の計画的・継続的実践

〇実態把握
〇家庭・地域との連携
〇学習環境の整理･充実

★ふるさとに対する豊かな感受性の育成
↑
ふるさとについて学ぶ

★ふるさとに関する見方や考え方の育成
↑
ふるさとから学ぶ

★ふるさとに働きかける実践力の育成
↑
ふるさとのために学ぶ

つ　な　ぐ

総合的な学習の時間

一人ひとりのよさの発見

道徳的価値の実践　補充・深化・統合　知の総合化　往復　教科指導の充実　主体的実践力　発展

道　徳　　各　教　科　　特別活動

学習の基本スキル　　コミュニケーション能力

伝　え　合　い

各教科の充実　　体験活動の推進

地域との連携のよさ

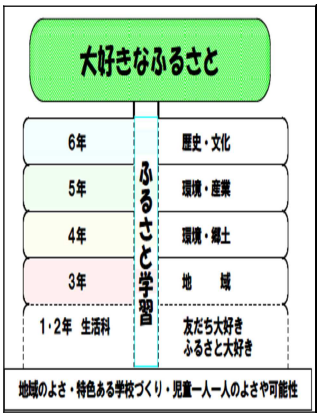
人権教育の視点【人権尊重　豊かな感性　科学的・合理的な見方、考え方　学力向上　仲間づくり　自立・実践力　健康な体づくり】

Ⅱ　研究の実際

１　児童の「課題」を大切にしてくらしを見つめ学びをつなぐ授業構成の工夫（仮説１）

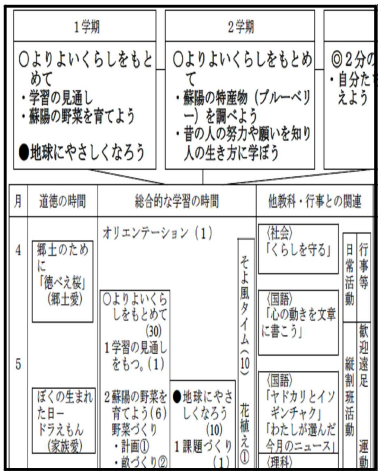
（１）　ふるさととつなぐカリキュラムの構築

①　授業構成の工夫



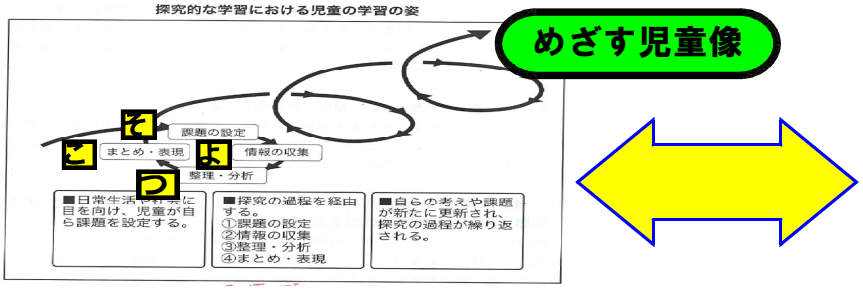
【各学年のテーマ】

ふるさとを大切にし、進んで考え行動できる児童を育成するためには、探究的な学習の展開が必要となる。そこで、ふるさと学習が「物事の本質を探って見極めようとする一連の知的な営み」となるように、児童の「課題」を大切にして、くらしを見つめ学びをつなぐ授業構成を工夫した。まず、「そよっ子のふるさと学習」のカリキュラム作成では、上図のように学年の系統を考えてテーマを設定し、各学年のねらいを明確にしてこれまでの総合的な学習の時間の年間指導計画を見直した。次に、探究的・協同的な学習となるように、左図のように生活科や総合的な学習の時間を中心に国語科、社会科などの各教科、道徳、特別活動などを横断的につなぎ「単元の位置づけ」を作成した。そして、蘇陽の価値ある素材を教材化して、ふるさと学習を効果的に取り組むことができるように整理した。例えば、６年生では、テーマを「歴史・文化」と設定して、脈々と受け継がれている伝統文化でありながら、児童にはあまり浸透していなかった神楽を教材化した。（実践事例１）また、２年生では、生活科の学習との関連を考え、道徳の時間と生活科の時間が相互に効果を高め合うように工夫した。（実践事例２）



②　学習過程

探究的な学習がスパイラルに展開していくことをねらって生活科や総合的な学習の時間では、小学校学習指導要領解説（総合的な学習の時間編）を参考に「そ・よ・つ・こ」の学習過程を使って学びを進めてきた。



【学習過程】

そ（うか、これをがんばるぞ）
よ（し、やってみるぞ）
つ（たえよう）
こ（れからのわたしたち）

【学習過程】

（２） 児童の「課題」を生み出す資料の提供、教材教具の工夫

【思考ツールの活用】

２年生の生活科では、友達の家族や地域の人に出会わせていく体験活動と、探検の気付きをマップにまとめ表現する場面を効果的に繰り返しながら学習を展開していくことで、気付きの質を高めるようにした。交流場面では、思考ツール（すいかチャート）を活用したことで、互いの気付きや考えを可視化したり、考えを練り上げたりしやすくした。（実践事例３）

また、３年生の総合的な学習の時間では、「蘇陽をこん虫パラダイスにしよう」の単元で、蘇陽の環境のよさや豊かさに気付かせることをねらった。右図のように再追究の場面では、「なぜ、モートンイトトンボは、熊本では蘇陽にしかいないのだろうか？」というさらなる課題を提示して、予想を立てさせ、主体的に情報を収集するようにした。

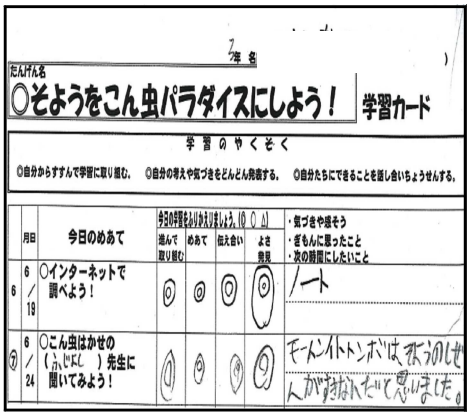
〈3年総合〉
「蘇陽をこん虫パラダイスにしよう！」
○蘇陽には、どんな生き物がいるかな？
↓
☆さらなる課題の追究（再追究）
◎なぜ、モートンイトトンボは、熊本では蘇陽にしかいないのだろう？
↓
課題の追究（再追究）

【神楽披露】

さらに、６年生の総合的な学習の時間「見つめよう　わたしたちのふるさとⅡ」の単元では、「伝統を受け継ぐこと」「一度途切れた伝統を復活させたこと」について課題設定を行った。これは、自分のこれからの生き方について考えるきっかけづくりにも活用することができた。

（３） 児童のよさを伸ばし生かすための評価の工夫

児童自ら学習活動でのよさや次の課題をとらえやすくするための自己評価カードを右のように低・中・高学年で作成し、学びの成果を評価するものとして自己評価を重視した。一人一人のよさや変容を見取るために活用し、目標達成に向け、指導の改善にも役立てた。また、児童自らが実践を振り返るポートフォリオにして保管し、学びの質や深まりの様子を具体的に把握できるようにしたり、取組を振り返ったりして、児童のよさを伸ばし生かせるようにした。


たんげん名
○そようをこん虫パラダイスにしよう！ 学習カード
学習のやくそく
◎自分からすすんで学習に取り組む。 ◎自分の考えや気づきをどんどん発表する。 ◎自分たちにできることを話し合いちょうせんする。

	月日	今日のめあて	今日の学習をふりかえりましょう（◎ ○ △） 進んで取り組む	めあて	伝え合い	よさ発見	・気づきや感そう ・ぎもんに思ったこと ・次の時間にしたいこと
	6/19	○インターネットで調べよう！	◎	◎	◎	◎	ノート
◎	6/24	○こん虫はかせの（ふじにし）先生に聞いてみよう！	◎	◎	◎	◎	モートンイトトンボは、ほかのしせんがすきなんだと思いました。

【自己評価カード】